

本巻は、21の質問・疑問に一つ一つ谷口雅春先生が答えられる形式で進められている。そのことを、谷口雅春先生は「はしがき」で次のように述べておられる。

「質疑篇」は「生命の真相」の読者から、人生問題、哲学の諸問題、宗教問題、靈魂の問題、個性の問題、因縁因果を超越する問題等につき、座談会の席上又は書面にて質問せられたのに対して懇切に解説を加えたものである」

それらの質問・疑問はおおよそ次のようなものである。

病気はないと言うが、現象としてはあるのではないか／大火などの災害で人が焼死す

るのはなぜか／神は完全だという証拠はあるのか／完全な神と不完全な人間とは相容れないのではないか／他の宗教を信じつつ、生長の家を信仰してよいか／霊界とこの現実世界との相異について／なぜ物質なる肉体に痛覚があるか／どんな場合、個人の信念は人類意識に打ち勝つことができるのか／死後の靈魂と肉体との関係について／唯一神とその他の神とは区別すべきか／人によって異なる個性はどこから来るのか／人間は完全円満と説かれると同時に無限生長するとも説かれるが、完全なのに生長するのは矛盾ではないか／心の正体とは何か／長年の病気は治るのか／墓地で瞑想すること／悟りも迷いも結局は夢ではないか／生長の家は病気治しや奇蹟の宣伝ばかりしている／生長の家は靈魂の輪廻転生を説くのか／悟れば、自己の「我」がなくなり、大生命の海に帰入するのか、等々。

この中で、中根氏が提出した問題は、「病はないことはない。病は現象としてあるのである。それを『病なし』と言いつけるのは言い過ぎである。現象はないことはない、現象を全否定してしまうのは間違いである」(三三三頁)と言って、谷口雅春先生の「現象な

し」の教えに反論している。

この問題は「唯神実相論」への根本的反論であるが、谷口雅春先生の詳しい回答は本書を読んで頂きたいが、要約すれば以下の如くである。

「『現象は実在でない、病は実在でない』という言葉は『生命の真相』の各所で説いているが、さらに進んで『現象はない』『病気はない』と言い切っている。なぜそういう言葉を使うかと言えば、我々が日常使う言葉は、現象界で使う言葉であって実相に直参する言葉ではないから、その言葉を使って実相に直参させるためには、普通とは違う言葉遣いが必要なためである。『真理』を語る言葉は靈感に導かれてはいるが、谷口雅春先生御自身の人間的工夫が大きい。『現象なし』『病気なし』を『現象』も『病気』も無いのではない。現象としてはある。実在でないだけである』という長たらしい緩慢な説明ではなく、『無し』と言いつ切り、一喝するように断言する。そうすれば、続々と病気が治り、環境が整い、経済状態がよくなるという体験が続出するようになる。なぜそんな現象が現れるかと言えば、世間一般の人は現実界の出来事、不幸、病気、災難などはあると思っっているからである」

そして谷口雅春先生は、「あると思うが故に捉われ、捉われるが故に病気に懼りやすく、懼った病気が治り難く、却って老死を速め、不幸災厄の前に屈服してしまうのである。しかしこれらの不完全な現象は、『あるように見えてもないんだぞ』と私が掛声をかけてあげると病気に崩折れていた人が妙に立上り、もう老衰していたと見える人が若返って白髪まで黒くなり、不幸の前に勇気を失っていた人が勇気を回復して事業に邁進成功し、意地悪の姑や、放蕩の良人なども、あるように見えてもないんだぞと掛声かけると、そんな悪い姑や良人はない、神の子たる本当に深切な姑や良人ばかりがあると思っって姑や良人に隔意なく事えるようになって、今迄地獄状態であった家庭が光明化した実例もたくさんあります」(三九〇頁)と述べられるのである。

「生長の家で私が『ない』という言葉を現象に関して使う場合は、哲学上の理窟をこねるためではなく、老病不幸等(現象)をある、と思っって執著して、却っって迷い苦しんでいる人に、その迷い苦しみを取去るために、応病与薬的に投げかける喝であった

て、それが「言葉の薬」として実際に迷を去る上に効果を顕して迷が去り、老病不幸が治っていれば、それで私の目的はとげられ、信徒が「生長の家」や「生命の真相」を読む目的を達せられているのであります（四〇〜四一頁）

また、肉体には痛覚細胞があるから痛みを感じるものであるから、「物質には知性なく感覚なし」と説くのはおかしい、との質問に対しては、

「痛覚の細胞はラジオの受信機のようなものであります。痛即ち心的不調和の波動）はアナウンサーの放送のようなものであります。アナウンサーの放送があつても、ラジオセツトがなければその放送はここでは鳴り出さないでしょう。それと同じく、不調和な波動が肺臓に起つていまして、痛覚細胞なる受信機がなくては、その痛は鳴り出さないので。ところがラジオが今鳴つているとしましても、私は原稿書きに熱心になる時にはそのラジオの音を忘れてしまつて原稿を書くことが出来ます。これはラジオが鳴つていても、自分がその方に心を向けなくて原稿を書くの一心になつてゐるからです。

またあなたは皮膚には痛覚神経がこまかく分布しているからちよつとした擦傷にも痛を感ずると言われますが、江間式その他の気合術などの実験ではヘヤーピンを百数十本も全身に突刺しても痛まない例もあります。これは痛覚神経があり、不調和の波動がある、しかし心が痛を感じようとしないから痛まないのです」（八八〜八九頁）と答えておられる。

その他、霊魂や霊界の問題、因縁因果の問題にも実に微に入り細を穿つて説明をされている。ぜひ全篇を通してお読み頂きたい。また、谷口雅春先生は青年の質問にも丁寧な答えられ、最後に「左様なら。好青年、健在なれ」と結んで、この青年の前途を祝福しておられる。いかに青年を大切にしているかが伺われる。

本巻は、谷口雅春先生の「教え」の重要部分に関する問題が多く取り上げられており、青年のみならずすべての老若男女必読の書である。

令和元年九月吉日

谷口雅春著作編纂委員会